

氏名（本籍）	モリ 森 孝 晴（鹿児島県）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	乙 国第2号
学位授与年月日	平成25年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
論文題目	ジャック・ロンドンと鹿児島ーその相互の影響関係ー
論文審査委員	主査 野中 哲照 教授 副査 外薮 幸一 教授 副査 千葉 義也 名誉教授（鹿児島大学）

## 内容の要旨

本論文は、アメリカの作家であるジャック・ロンドン（1876～1916）と鹿児島の人々との影響関係について述べたものである。2部構成で、第1部が4章から、第2部が7章から成り、全11章である。第1部は鹿児島人がジャック・ロンドンに与えた影響、第2部はジャック・ロンドンが鹿児島人に与えた影響について、それぞれ考察したものである。このうち、第2部の半分は森孝晴氏による既刊の書『棕鳩十とジャック・ロンドン』（鹿児島：高城書房、1998年）の内容を含んでいる。

なお、枚数は20万字（原稿用紙500枚）を超えた重厚なものである。

以下、各章ごとに要旨を述べる。

### 第1部第1章 鹿児島とカリフォルニア、ジャック・ロンドンと日本

第2章以降でジャック・ロンドンと鹿児島との関係を指摘する前提として、まず第1章において明治期の移民問題やジャック・ロンドンの青年期の事績について述べている。すなわち、アメリカの作家と鹿児島との関係がなぜ生じたのかという、当然想定される疑問に対応すべく執筆された部分である。森氏は、国分、颯娃、串木野などの資料を博捜し、明治初期に鹿児島からアメリカのカリフォルニア州への移民が多かった事実をまず指摘した。鹿児島は士族崩れが多く、そのため広島、和歌山と並んで移民の多い県であったとも指摘する。一方アメリカの中でも、カリフォルニア州のサリーナスやコロマやサンタローザなど日本人が多く移住した町が存在した点にも触れている。このような堅実な考証により、日本の中でも鹿児島、アメリカの中でも西海岸・カリフォルニア州との結びつきが強かったことが明らかにされた。

また、ジャック・ロンドンの作品に〈日本もの〉が多いことや、ジャック・ロンドンが知日家として知られていたことを概論的に紹介している。

### 第1部第2章 ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響——黒木為楨<sup>ためもと</sup>の場合

ジャック・ロンドンは2度来日している。1度目はアザラシ漁船の乗組員として小笠原や横浜に寄港した程度であったが、2度目は日露戦争の従軍記者として4か月ほど滞在し、とくに日本の軍人と密接に接触したことを指摘している。その中でも、鹿児島出身の黒木為楨が当時の欧米社会でゼネラル・クロキとして著名な存在であったことに森氏は着目し、ジャック・ロンドン自身による125頁にもおよぶ従軍記の中に、薩摩武士の気質をそのまま反映したらしき日本軍の勇敢さ、透徹した観察眼、軍略の賢明さ、沈着冷静な態度、静と動とのメリハリなどへの瞠目がみられることを指摘した。そして、ジャック・ロンドンが注目したそれらの日本軍らしさは、薩摩武士の示現流の特徴的なところと符合すると指摘している。

ただし、それはポジティブに称賛する側面ばかりではなく、日本人を脅威としても認識するネガティブな側面も併せ持っている、と森氏は述べている。この分析によって、のちにジャック・ロンドンの小説の中に薩摩武士の影響を見出す方向性も、あるいはまた黄禍論という日本人脅威論に向かう方向性も、どちらも合理的な説明がつくようになっている。ゆえに、森氏の論の中でここは重要なところである。

### 第1部第3章 長沢鼎の武士道精神について——手紙の下書きに触れて

ジャック・ロンドンが黒木為楨の次に出会った日本人として、森氏は長沢鼎に注目する。長沢も鹿児島出身で、薩摩武士の気風を伝える者であった。長沢は慶応元年（1865）に薩摩藩英国留学生として鹿児島を出発した15名の中の一人で、一行の最年少であった。長沢はイギリス、アメリカのニューヨークを経て明治8年（1875）にはカリフォルニア州サンタローザに移住し、ファウンテングローブの丘を購入し、ワイナリー創設に関わった。その後、長沢は農場と醸造会社を譲渡され、ブドウ王と呼ばれるほどの存在になった。

森氏は、長沢の中に薩摩の武士道精神を見出し、それがジャック・ロンドンの〈日本もの〉に大きな影響を与えたことを指摘した。長沢が薩摩の郷中教育を受けていることは間違いないので、そこで薩摩の武士道精神が涵養されていることは疑いない。そのことが、数多く残されている長沢の写真の中でただの一枚も笑ったものがないこと、実名である磯長彦輔ではなく島津の殿様から与えられた長沢鼎の名を生涯使い続けたこと、島津忠重がサンフランシスコを訪れた時に長沢が土下座したこと、居合抜きを披露した際の素早さに示現流的な性質を見出しうることを、森氏は指摘した。

森氏は、長沢が明治4年（1871）4月23日頃に19歳で書いた手紙の下書きを分析し、その中にも薩摩の武士道精神や日本への愛国心が窺えることを指摘した。

## 第1部第4章 ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響——長沢鼎の場合

ジャック・ロンドンは薩摩の武人に出会う前から短編「おはる」（1897年）を書いていることから、もともと日本に対する一定の関心を抱いていたと思われる。そして、黒木為楨や長沢鼎との出会いによってさらに日本人への関心を強め、生涯を通じて〈日本もの〉を書き続けることとなり、その数は10作を超えた。

ジャック・ロンドンと長沢とが直接交流していた事実は、これまで突き止められていなかった。しかし、両者の住所はほんの十数キロメートルの近さであり、ジャック・ロンドンの知日的性格から二人が無関係であるとは考えにくい。この想定から、森氏は、長沢が死亡した日の新聞記事にジャック・ロンドンがしばしば長沢邸を訪れていたという記述を発見した。さらに、世界的に著名な園芸家であるルーサー・バーバンクを介して、ジャック・ロンドンと長沢とが同じ交友圏にいたことを明らかにした。

そのうえでジャック・ロンドンの作品をみると、『野性の呼び声』（1903年）、『白い牙』（1906年）、『チェリー』（1916年）などの人物像・動物像の造型、とくに動物の野性を描く際に、薩摩の武士道精神に通底するような要素がみられることを、森氏は指摘した。

## 第2部第1章 椋鳩十と鹿児島——ジャック・ロンドンから松風まで

椋鳩十は長野県下伊那郡喬木村の出身で、飯田中学校の卒業生である。その椋が鹿児島に来ることになったのは、ジャック・ロンドンの『南海物語』『野性の呼び声』『白い牙』を読んで、南洋への憧れを強く抱いていたからである。椋は、種子島の中種子高等小学校の代用教員として、鹿児島に来たのであった。椋にジャック・ロンドンの面白さを伝えたのは飯田中学時代の恩師正木ひろしであった。その後、種子島から加治木に居を移し、加治木高等女学校の教師、鹿児島女子短期大学の教授、鹿児島県立図書館の館長などを務め、生涯鹿児島を愛することになった。森氏は、椋の作品を動物文学としてではなく、〈エコロジー〉〈共生〉などの環境文学的な側面から再評価する必要があると説く。

## 第2部第2章 ジャック・ロンドンと薩摩文人——椋鳩十の動物小説へのロンドンの影響

森氏は、椋鳩十記念館所蔵『トルストイ叢書4 ハヂ・ムラート』の背表紙に椋の筆跡で「ジャック・ロンドン」（縦書き）と鉛筆によって落書きされていることを発見し、椋鳩十がジャック・ロンドンから受けた影響の強さを補強した。さらに森氏は、椋の言説の中から、彼がとくに『白い牙』に傾倒していたことも指摘した。椋がジャック・ロンドンから受けた影響は、海の世界だけではなく山の世界にも及んで重層化し、椋文学の中の重要な要素である〈自由〉や〈ロマン〉もジャック・ロンドンの影響である可能性があるとして、森氏は分析した。相違点として、椋の対自然観は楽観的で、人間と動物との交流を描こうとするような意味でのヒューマニズムを垣間見せるが、ジャック・ロンドンの対自然観は弱肉強食の厳しさに重点を置き、そのペシミズムを浮き彫りにするものだと、森氏は指摘する。

### 第2部第3章 椋の山窩小説群と獵師物語『野性の谷間』へのロンドンの影響

椋十は、獵師物語や山窩小説を多く残している。山窩とは山奥に住んで定住しない漂泊民で、これに着目した文学領域は椋が切り拓いたものだと、森氏は指摘する。そして森氏は、椋の山窩小説にジャック・ロンドンの『南海物語』が強い影響を与えたものと分析した。それ以外に、スペインの作家ピーオ・バローハ『バスク族牧歌調』の影響などもある。椋らしい世界が開けてきた。それは、エキゾチズムであり、バーバリズムであり、山の世界に生きる動物や人間に、野性や原始的生命力のたくましさを窺おうとするものであった。その根底的な理想や信念が、ジャック・ロンドンと椋十とで共通するものだと、森氏は指摘した。

なかでも、長編獵師小説『野性の谷間』は、椋自身が「若き日にジャック・ロンドンに惹かれて野性的作品に開眼した作者が長年の思いを凝縮したような作品」と言われている。森氏はその影響を具体的に摘出し、進化論的な適者生存や弱肉強食というキーワードの存在を指摘した。しかし椋は受け身のままではなく、ジャック・ロンドンの影響下から脱却して、〈共生〉のテーマへと歩み出している。森氏は、そこを評価している。

### 第2部第4章 椋の視点でロンドンを読む——『白い牙』と共生の論理

先行研究では、ジャック・ロンドンの代表作は『野性の呼び声』であって、『白い牙』はその二番煎じであるかのように評価されていた。しかし、椋十へのジャック・ロンドンの影響を分析したのちに、再びジャック・ロンドンの作品評価に戻ってみると、むしろ『白い牙』のほうにこそジャック・ロンドンの目指した方向性が含意されていたのではないかと思われる、と森氏はいう。すなわち、〈自然との共生〉というテーマの萌芽が、椋ほどに明確なかたちではないものの窺えるというのである。その意味で『白い牙』は、『野性の呼び声』の続編や二番煎じではなく、〈文明と自然との対立〉から〈人間と自然の共生〉へと確実にテーマ性を深めたものといえることができる。つまり、椋十というフィルターを通すことによって、ジャック・ロンドンの再評価もできると森氏は述べている。

### 第2部第5章 ジャック・ロンドンと椋十——椋はロンドンの「戦争」も読んだ

ジャック・ロンドンの「戦争」（1911年）は、敵を殺すのを躊躇することを嘲笑し、むしろ敵を殺すことが正当化されるのが戦争の冷厳な現実だということを描いた作品である。椋自身が自らの講演において、「戦争」から影響を受けたと語っている。森氏はまず、椋がどの版で「戦争」を読んだかを明らかにし、椋がジャック・ロンドンの文学活動のほぼすべてを把握していたと述べている。さらに森氏は、椋が自らの興味に沿って芋蔓式にジャック・ロンドンの小説をどの順序で読んで行ったかという、椋の読書生活の有様まで明らかにしている。

## 第2部第6章 ジャック・ロンドンと椋鳩十——「戦争」と『マヤの一生』

前章を受けて、森氏は、椋の作品の中でも代表作の一つである『マヤの一生』に、ジャック・ロンドン「戦争」の影響が強く出ていると指摘している。具体的には、表現技法、ストーリー展開、むごい戦闘場面を描くことなく絶対悪としての戦争の不条理を訴えているテーマ性まで共通しているところである。

## 第2部第7章 ジャック・ロンドンと薩摩文人—宮原晃一郎と山本実彦の場合

宮原晃一郎（1882～1945）は、現在の鹿児島市加治屋町の生まれで、文部省唱歌「我は海の子」の作詞者である。宮原は28歳のときにジャック・ロンドン『野性の呼び声』を有島武郎の講義によって読み、38歳の時に宮原自身が『白い牙』を翻訳するに至っている。これは日本における『白い牙』の初訳であり、椋鳩十が中学二年生で『白い牙』を読んでいるので、椋が読み得たのは宮原訳のそれであったことが判明する、と森氏は指摘している。

山本実彦（1885～1952）は、現在の薩摩川内市の生まれで、雑誌『改造』の主宰として知られる。山本は改造社の経営者でもあるが、22年もの長きにわたってジャック・ロンドンの作品の翻訳を出版し続けた。なかでも、『奈落の人々』の翻訳は10年間に2度も出版している。山本の、ジャック・ロンドンへのこだわりが窺える、と森氏は述べている。

# 審査結果の要旨

## 1. 評価

第1部においては、鹿児島出身の陸軍大将黒木為楨（ためもと）や長沢鼎がジャック・ロンドンに与えた影響がいかに大きかったかを指摘しているが、その指摘に留まらず薩摩藩の武士道の特質や幕末から明治期の日本の移民政策について述べるなど社会的背景にまで言及するまなざしを有しているところは、論の完成度として秀逸である。この指摘によって、ジャック・ロンドンの小説自体の解釈が深まったり再評価が求められたりもするので、ジャック・ロンドンの論としても重要な指摘であるといえる。すなわち、アメリカでジャック・ロンドンの分析をしている研究者にも影響を与えるほどの内容となっている。

第2部においては、ジャック・ロンドンの小説が鹿児島人に与えた影響について椋鳩十を中心に論じているが、椋に対する影響だけでなく山本実彦、宮原晃一郎への影響まで指摘しており、深みにおいても広がりにおいても抜群の水準に達している。

全体を通して、具体的には、次のような点が特筆されるべき研究成果である。

- (1) ジャック・ロンドンの作品に黒木為楨の武士道精神が投影していることを指摘した点。

- (2) 長沢鼎の人物像を詳細に分析し、そこに薩摩の武士道精神を見出したうえでジャック・ロンドンへの影響を明らかにした点。
- (3) これまで未解明であったジャック・ロンドンと長沢鼎の直接的交友関係の実態を指摘した点。
- (4) ジャック・ロンドンの作品の再評価を促した点。
- (5) ジャック・ロンドンと椋鳩十の世界の共通点と相違点を明らかにした点。
- (6) 椋鳩十がジャック・ロンドンの作品のどの版を読んだかまで明らかにした点。

ここで述べられている個々の指摘について先行研究はほとんど存在せず、その独創性は際だっている。まさにパイオニア的な仕事を成し遂げたものである。長沢鼎とジャック・ロンドン、ジャック・ロンドンと椋鳩十という個々の影響関係論に留まることなく、鹿児島とアメリカの国際交流という俯瞰的視界の中に各論が位置づけられている点も、本論文の見識の高さを示している。

以上のように、形式面（分量）、章立て（論理構成）、論の独創性、完成度、いずれの点からみても本論文は申しぶんのない水準に達している。

## 2. 残された課題

本論文は優れた論文であるが、次のような残された課題もある。

- (1) 第1部と第2部との連携がより密なものになるように記述を加えられたい。ジャック・ロンドンと鹿児島との関係の深さが偶然として説明されるのではなく、当時の社会的背景として必然であったというような説明がほしいところである。
- (2) アメリカ19世紀の人種観・民族観について、社会学的な知見をもっともう少し肉付けされたい。
- (3) 〈人間と自然との共生〉がジャック・ロンドンと椋鳩十とで共通するかどうかを直接述べる前に、その前提として、〈自然と人間とを対置的に考える西洋的思考〉と〈人間を自然の一部と捉える東洋的思考〉の相違について述べる必要がありはしまいか。その部分への補筆があればなお理想的な論になりそうである。
- (4) 武士道精神の定義について、より明瞭にされることを期待したい。

このような課題は残されているものの、本論文の水準の高さや完成度の高さからすれば些細なものであり、これらによって本論文の価値を貶めるほどの瑕瑾ではない。公刊までに修正されればよいものとする。

## 3. 結論

以上、本論文は、研究史上初めてジャック・ロンドンと鹿児島との関係を明らかにしたものであり、緻密で実証的な考察により相互の影響関係を数多く指摘した。独創的な研究でありながら、その方法はきわめて堅実であり、斯学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文の著者は博士（国際文化学）の学位を授与されるに十分に値すると認められる。

以上